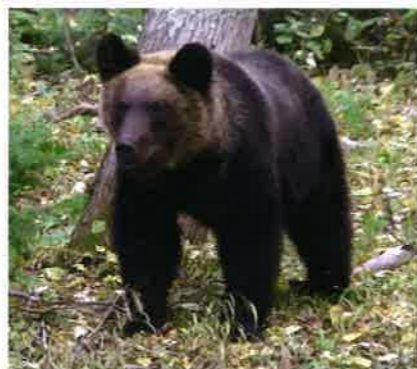




ダートバイオブシーで採取したヒグマの皮膚片

麻酔銃で飛ばす皮膚片採取用注射筒(ダート)



3年間に100回以上追い払いを実施した若いオスヒグマ

### 何回追い払っても、結局最後は死んでいく

人為死亡数全体と比べると少ないが、ここ数年、私が複雑な気持ちでその死を見送った、ある意味無駄に死んだヒグマたちが13頭ほどいる。彼らは13〜18年に斜里町と羅臼町において、地域住民などの安全上のリスクを主な理由に、行政からの指示で射殺されたヒグマの一部である。これらの個体に対しては、ヒグマ対策業務を行政から請け負っている知床財団の職員が、ゴム弾や花火弾などを用いて何度も追い払いを実施したが、期待するような行動改善が認められなかった。なぜ、彼らの行動は変わらなかったのだろうか。

### 知床におけるヒグマの個体識別

知床財団の職員は、通報を受けるなどして出動し、ヒグマ目撃現場に到着すると、まずはヒグマと人間の位置を確認し、人の安全確保とヒグマの個体識別を試みる。知床世界自然遺産地域の管理計画の一つである「知床半島ヒグマ管理計画」では、個体ごとの行動段階の判定と



車から降りて親子グマに無防備に近づく人々

# 知床半島のヒグマの現状

国立公園内で進む人なれと分散先で死んでいくクマたち

## 知床半島のヒグマ個体群は大丈夫か

知床半島の斜里町と羅臼町の2町においては、2012〜17年の6年間に合計224頭(年平均37・3頭)のヒグマが有害捕獲・狩猟・事故といった人為的原因で死亡した。有害捕獲の主な理由は、斜里町では農作物被害、羅臼町では住宅地への侵入・接近であった。

忙しい農家にとって、広い農地の電気柵を完璧に維持管理することは難しく、電気柵よりも地元猟友会員による有害捕獲に期待する声は今でも大きい。また、リスクの高い住宅地周辺では、2〜3回追い払っても再び出てくるようなヒグマの射殺は避けられない側面がある。しかし生息頭数の推定精度があまり高くない現状では、知床半島のヒグマ個体群維持のため、なるべく無駄な人為死亡は減らしたいところである。

行動履歴の蓄積を、目撃地点の地区区分(人間優先度)とともに重視している。近年、小型ビデオカメラの倍率などの性能向上により、追い払い直前にごく短時間撮影した動画からも多くの情報を得られるようになり、外見による個体識別精度が向上した。また、北海道大学獣医学部の下鶴倫人准教授らの研究協力により、遺伝子による答え合わせが可能になった。新鮮な糞便、毛根付きの体毛、麻酔銃で特殊な針を飛ばしてヒグマから採取した皮膚片を用いて、遺伝子による個体識別が生きている個体で行われている。さらに、斜里町、羅臼町および標津町で有害捕獲や狩猟で死亡した個体の大部分については、知床財団や役場の職員によって外部計測やサンプル採取が行われており、筋肉片は北大に送られ、過去に収集した遺伝情報との照合が行われる。かくして、死亡個体が誰でもどのような行動履歴があり、父親や母親が誰かまで明らかとなる。

## 個体識別の精度向上が明らかにした現実

このような調査態勢下で、10年前には何となく推測していた「人間を恐れ

ないヒグマは早死にする可能性が高い」という仮説が証明され始めた。斜里町側の国立公園内の中心観光地である幌別・岩尾別地区で12〜17年に生まれ、その後の独立が確認された子グマ6頭のうち、2頭(ともにオス)が、住宅付近で問題行動を起こして満3歳の春に射殺された。また出生地は不明だが、同地区の岩尾別川沿いで13年秋に多数の人々の接近撮影対象になった若い2頭のヒグマは、その後やはり住宅への接近や、釣り人のデイバックを荒らして中の食物を食べたことが原因で射殺された。テレビ局などに「ヒグマとの共生の理想郷」として扱われることが多いルシャ地区で06〜12年に生まれ、満2歳まで育った子グマ35頭のうち、17頭(49%)がその後、人為的要因で死亡した。特に出生地から遠い場所に移動・分散していく傾向が強いオスに限れば、最大で82%が人為死亡したことが明らかになった(下鶴准教授、私信)。若い時に国立公園内で人間と接して暮らすと、人間を避けないうヒグマに育ちやすいようだ。そして移動分散先の住宅地周辺や畑作地帯で、国立公園内と同じようにのにきき行動

文◎石名坂 豪 写真◎知床財団

いしなざか・つよし/1973年、東京生まれ。(公財)知床財団主任研究員。獣医師、博士(獣医学)。学生時代から海生哺乳類の鱗脚(きぎゃく)類の研究で知床に通い、2006年より知床在住。ヒグマ・エゾシカを中心とした野生動物の対策・調査に従事。知床半島の東西にある羅臼、斜里の両町でヒグマ対策に従事した経験を持つ。

時代は変わり、ヒグマは人間を恐れなくなった。観光客も地域住民も、昔とは違って大胆なヒグマが多い地域に足を踏み入れている、あるいはその中で生活している自覚が足りないまま、危

変わるヒグマ、  
変化についていけない人間

半島西側の斜里町には年間約120万人の観光客が来訪し、有名観光地の知床五湖だけでも30万人以上が訪れる。一方、斜里町内のヒグマ目撃件数は1995年以降急増し、2015年以降は年間1千件以上の状態が続いている。目撃地点の多くは国立公園内の道路沿いであり、最近では車から降りて、ヒグマに接近して撮影する人々が多数見受けられる。ヒグマにとって、無慮慮に近づいてくる人々は目ざわりだろうが、写真を撮るだけで直接危害を加えてくわけではない。無害な接触を繰り返していくうちに、人間は警戒対象ではなくなっていく。時々、知床財団の職員がやってきて、ゴム弾や花火弾などで追い払おうとするが、圧倒的多数の「無害な人間」との接触が、その忌避学習効果を打ち消しているようだ。人間全体ではなく、追い払い用の散弾銃を持って接近してくる財団職員やその車だけが警戒対象として学習される。このようにして、人を恐れない「人なれヒグマ」が国立公園内で増加している。



破壊行動を繰り返す危険なクマを生むきっかけ(屋外放置生ごみをヒグマが荒らした痕跡)



小麦畑のヒグマ被害



クマ渋滞の一例。両側駐車場で通行に支障が出ている



シャッターを壊して倉庫内に侵入したヒグマが干し魚を荒らした痕跡

09B06、YK、VL、08B14、CM、MK、SH。これらは国立公園内の道路沿いに今年も頻繁に現われ、私たちがゴム弾などで何度も追い払っているメスグマたちの名前である。車を降りて撮影する人々が多く、残念ながら人なれが既に進行している。彼女らやその子グマの写真がSNS上にあふれているが、数年後、それらが遺影となっていないことを祈るばかりである。某雑誌の表紙のように。

いま道路沿いで  
簡単に撮影できるヒグマと、  
その子グマたちの運命は？

ない行動を続けている。危ない行動とは何か。音を出さず、クマスプレーを持たずに森の中を歩く、ヒグマを見て車から降りる、ヒグマに自ら接近する、食べ物を投げ与える、生ごみや魚を不法投棄する、生ごみを屋外に放置する、コンポストを使う、魚を低い所に干す、家の周りのヤブを放置する、シカや海獣の死体に近づく、などである。裏を返せば、これらは知床に限らず、全道のヒグマ生息地に当てはまる。

知床国立公園は  
ヒグマに悪い教育を施している

知床半島の産業は観光だけではない。農業や漁業、水産加工業も盛んで、その生産額はいずれも100億円以上である。斜里・羅臼の両町合わせて1万7千人の住民がおり、保育園や学校もある。羅臼町で盛んな昆布漁では、夜間に海岸

知床にも人々の生活があり、  
人間は不完全な生き物である

の干し場で行う作業工程がある。斜里町の農地の一部は電気柵で守られているが、従来被害が多かった畑に重点的に電気柵を張ると、ヒグマは他の畑へ移動して新たな被害を出す。住宅地ではいくらか啓発しても「今まで大丈夫だったから」と、生ごみが入ったポリバケツや干し魚をヒグマの手が届く場所に置いてしまう住民が必ずいる。それがヒグマの執着心に火を点け、倉庫や家を破壊して再び人の食物を得ようとする、数段危険なヒグマを作り出すことを理解してくれない。あるいは理解しても、



0歳の子グマを守ろうと車を威嚇する母グマ



年間53万人が利用するウトロの道の駅敷地内にあったルシャ地区生まれの若いオスヒグマの糞(矢印)

数年後には油断して同じことを繰り返してしまふ。言葉を通じて文字を読めても、行動改善になかなか結びつかない。残念ながらそれが人間である。そのため知床であっても、人間優先ゾーンではヒグマへの対応を厳しくせざるをえない。農地や住宅地へ日中無警戒に現われるような人なれヒグマは、目立つため真先に射殺対象となりやすい。これが、ルシャ地区や幌別・岩尾別地区で生まれ育った若いヒグマの人為的死亡率が高い一因であろう。

人間側の問題行動の  
コントロールが必要

知床国立公園内ではヒグマの人なれが進み、おそらくそれが一部のヒグマたちの死を早めている。さらに最近では深刻な「クマ渋滞」が頻繁に発生し、道路の正常な機能も損なわれている。ヒグマを追い払っていったん道路から見えない状態にしなければ、渋滞はなかなか解消しない。警察でも道路管理者でもない私たちが車内に戻るよう、車を進めるように呼びかけても、人々の動きは鈍い。結局、人なれヒグマが複数いる状況下で、現状の自由気ままな公園利用を放置